

平成29年10月19日
山形大学

ペルー北海岸シカン遺跡における新発見

山形大学学術研究院 松本剛准教授（人類学）が率いる研究チームが、2017年8月10日から約7週間にわたり、ペルー北海岸シカン遺跡にて発掘調査を実施しました。従来の説では、当該社会は11世紀中頃の気候変動（大干ばつと大洪水）がきっかけとなって崩壊し、それに伴って首都であるシカン遺跡も放棄され、別の遺跡に遷都したと言われてきました。しかし、近年の同研究チームの調査から得られたデータは、気候変動後も遺跡は放棄されなかった可能性を示唆していました。今回の発掘調査において、大洪水やそれに伴う儀礼活動の痕跡が発見され、**気候変動の後にも遺跡は放棄されなかった可能性**が見えてきました。また、今回の発掘では、シカン以前の様式で埋葬された墓も見つかリ、**複数の民族が共存していた社会であった可能性**も出てきました。

■研究の背景と目的

発掘調査の対象は、ペルー北海岸で約千年前に栄えたシカンと呼ばれる社会です。宗教的な指導者を中心として、漁労や大規模な灌漑農耕、高度な冶金技術、遠距離交易などを基盤に繁栄しました（紀元後950-1100年頃）。今回発掘が行われたシカン遺跡は、最盛期の首都であったと考えられています。

一時は隆盛を誇ったシカンも、次第に衰退していきます。従来の研究では、首都中心部の神殿ピラミッドが燃やされていることを一般民衆による反乱の痕跡と見なし、遺跡放棄や社会衰退の原因を11世紀中頃に起こった大干ばつや大洪水などの気候変動とそれに続く社会混乱に求めました。しかし当研究チームによる近年の調査により、気候変動の後にも遺跡は放棄されずに様々な活動が行われた可能性が浮かび上がってきました。大規模な饗宴や儀礼活動の跡から得られた炭化物を年代測定したところ、得られた推定年代はいずれも12～13世紀のものだったのです。従来説のとおり、シカンは本当に気候変動が原因で崩壊したのでしょうか？

複雑社会の衰退や崩壊は一時の出来事ではなく、復興や拡大につながる動的なプロセスの1フェーズとして認識すべきです。ところが従来説では、環境因子を過度に強調した決定論的な議論が目立ち、近年盛んに議論されている社会生態系システムの弾力性や回復力といった概念が欠如しています。これに対し、本研究では人類社会と自然環境の相互作用とその通時的な変化を詳細に研究することによって、衰退から復興までのプロセスを長期的に見通し、従来説を見直すとともに、新しい説明モデルを構築・提供することを目標としています。

■新発見について

主に発掘を行ったのは、シカン遺跡中心部のピラミッド群に囲まれた大広場と呼ばれる空間です（図1）。□□神殿とベンタナス神殿の間に三つの発掘区（西から発掘区1, 2, 3）を設け、発掘調査を実施しました。



（お問合せ先）学術研究院准教授 松本剛（人類学）
gocito@human.kj.yamagata-u.ac.jp 電話 023-628-4220

● **発見1:** 上述の従来説で言及されている大干ばつや洪水の発生時期は、年輪のように一年ごとに層をなすアンデス山脈の山岳氷河（ケルカヤ氷河）のコアサンプルの分析結果から導き出されたものです。コアに含まれる砂塵や化学成分、氷の同位体の分析は、アンデス地域における1500年の気候変動を一年の時間分解能で示すことを可能にしました。しかしこれによってシカン遺跡が位置するラ・レチエ川流域における洪水そのものの年代が測定されたわけではありません。ペルー南部高地のケルカヤ氷河と北海岸のシカン遺跡の間には直線距離にして約1280キロ、高低差にして約5400メートルもの隔たりがあります。ラ・レチエ川流域での洪水の発生時期や、これによる影響をより正確に把握するためには、考古学発掘によって洪水堆積層そのものを特定し、含有遺物の年代測定によって発生年代を明らかにする必要があります。今回の発掘では、発掘区2における5メートルに及ぶ堆積層断面の詳細な観察と記録により（写真1）、いくつもの洪水の痕跡を見つけることができました。現在は、各種分析（年代測定、軟X線分析、粒度分析、珪藻分析など）のための試料輸出許可申請の準備をしています。



写真1: 地層断面と生贄遺体



写真2: 生贄遺体

● **発見2:** 上述の洪水層において、非常に保存状態の良い10体の生贄遺体が出土しました（写真2）。遺体は大きな窪地に投げ込まれるような形で埋まっていた。一部が欠損した不完全な遺体が多く、肉が付いた状態で解体されたことを示します。骨学分析の結果、いずれも25～30歳の男性であると推測されます。栄養状態が悪く、重労働に従事していたことを示す痕跡も見つかりました。また、堆積層の詳細な観察により、人身供犠は大雨や大洪水の最中もしくは直後に行われたことがわかりました。従来説で言われているように、気候変動は確かにあったようですが、人々はそれを黙って受け入れるのではなく、人身供犠という宗教儀礼によって抗おうとしたようです。今後は洪水の前後の様子を調査することによって、洪水と社会変化の関係性について詳しく追究していきます。

● **発見3:** 広場の中心近くで多量の副葬品とともに墓が見つかりました（写真3）。墓は冶金工房内の窯のすぐ横に作られていました。興味深いことに、遺体はシカン以前の文化様式（モチエ文化様式）で埋葬されていました。貴族のために金属製品を作っていたモチエ人の金属細工師が、死後に手厚く葬られたのであろうと推測されます。また、この新発見は、当該社会では文化的出自の異なる二つの集団が共存していた可能性を示唆しています。考古学的手法によって社会の多様性を証明するのは非常に難しいとされる中、このような形で発見されるのは極めて珍しいケースであるといえます。今後は、ナスカ研究所・坂井正人教授が「多言語であった」と主張しているナスカとの比較研究を予定しています。



写真3: 金属細工人の墓

今回の発見は、発掘現場でのインタビュー内容がペルー全国紙「エル・コメルシオ」やケーブルテレビ局Canal N、ナショナル・ジオグラフィック（スペイン版）、Archaeology Magazine（アメリカ）をはじめとする様々なメディアで報道されるなど、海外で大きな反響を呼びました。